

女男を表す他称について

大 浜 るい子

Differences of Address terms for women and men

OHAMA, Ruiko

キーワード：他称、フェミニズム、怠惰なディスコース、急進的なディスコース

1. はじめに

ここに紹介するのは、もともと別な目的で行われたアンケートの回答の中に、おまけのように書き添えられた言語現象である。このアンケートは「あなたはどんなタイプの異性が好きですか、嫌いですか」というもので、異性に対する女と男の価値観の違いを明らかにしようとするものであった。回答は、内容的には相変わらずの女男の固定的な価値基準や役割意識を反映したものが多く、今更ながらその根強さに感じ入った次第であるが、ここで問題にするのは、その内容ではなく、形式の方である。

回答は自由書き込み形式であったにもかかわらず、すべてが(1)に示すように、好ましいあるいは好ましくない特徴をあげただけの簡単なものであった。

- (1) やさしい
スポーツができる
めしがうまく作れる子
けばすぎる女
行動力のある人
背が高くない女性
理屈をこねる奴

その意味では形式というほどのものではないのだが、その中にひとつ気になる現象が見られた。内容的にも形式的にもさほど代わりばえがしない中であって、そこだけが回答者達の個性であるかのように私の注意を引いた。それは、それぞれの項目の最後に書き添えられた「女」「子」「奴」「人」などの一語である。最初は誰しも、こんな一語がついていようがいまいが、大したことはないと思う。全回答件数1515のうち、ついたものが708、ついていないものが807、ほぼ半分ずつである。(2)のようについたり

つかなかったり、あるいは(3)のようにいろいろな他称を取り混ぜて回答するのがあるかと思えば、中には(4)(5)のように一つのやり方で通すというのものもある。おそらく気まぐれか、そうでなければ個人の好みか習慣だろうぐらいで済ましてしまうところである。

- (2) 気がきかない、傲慢な人、無愛想な人、性格が悪い、料理がへた (回答者：男 (以下男とのみ表す))
- (3) やさしい、料理がうまい、美しい、きれい、かわいい、日本的な女性、ぼつちやりした人、田舎の女 (男)
- (4) 背が高い、かっこいい、スポーツができる、性格がいい、明るい、行動力がある (女)
- (5) タバコ吸う奴、へ理屈こねる奴、感情でものを考える奴、思いやりのない奴、自己中心的な奴、偽善者ぶる奴、頭の悪い奴 (男)

おそらくは何気なくつけ加えられたものであろう。しかしそれだけに、かえって私たちの言語使用のある面の本当の姿を描き出しているのではないだろうか。以下はこの「一語」をめぐる考察である。

これらの語は「一般呼称」と呼ばれることもある(漆田1980)が、国広(1990)の提案に従い、「呼称」は「君」「あなた」「きさま」など相手に対する呼びかけ語とし、それと区別するため「他称」という語を用いることにする。

2. 分析資料の概要

分析資料とするのは以下の二つのアンケートの回答である。

アンケート1：「あなたはどんなタイプの異性が

好きですか、嫌いですか」

アンケート2：「あなたがなりたいと思っている理想のタイプを書いてください」

アンケート1は自分以外の人間について言及するものだったので、自分のことを話題にする時の様子を知るため、別な対象者にアンケート2を行なった。どちらのアンケートも対象者は大学2年生（実施時と場所：1992年、松山市内）、回答は自由に書き込む形式でそれぞれ5つつつ書くよう指示した。この指示は必ずしも守られなかったので、数に多少差がでたが、女男それぞれの回答者数と回答数は以下の通りであった。

		好きなタイプ	嫌いなタイプ	理想のタイプ
回答者数	女	59	59	30
	男	59	59	33
回答数	女	308	299	148
	男	314	291	155
計		622	590	303

(表1)

3. 女男に見られる他称の不均衡

ここで使用された他称は次の12種類であった。但し、Cグループのものは話される時には同じ音になるであろうとの判断から一括して取り扱い、Bグループのものは女男で排他的使用になるので、これも「女か男」、「女性か男性」という形でまとめ、合計7種類とした。

A：女にも男にも使用できるもの：

「人」「奴」「者」「人間」

B：女男で固有語があるもの：

「女」「男」「女性」「男性」

C：女だけに使用されたもの：

「子」「娘」「娘」「こ」

	人	奴	者	人間	女男	女性 男性	子(娘)
好きなタイプ	219	1	1	0	5	5	22
嫌いなタイプ	223	19	3	0	26	3	10
理想のタイプ	138	4	0	21	6	2	0

(表2)

表2は、それぞれの他称のタイプ別使用頻度を表したものである。

圧倒的優位な「人」は別として、その他の他称はその使われ方に偏りのあることが見て取れる。「奴」や「女」「男」は嫌いなタイプに、「子」は好きなタイプに、そして「人間」は自分のことに言及するときに、使われやすいということがわかる。語にはそれに結びついた固有の意味があるということであろう。

同じ対象を指し示すのにいろいろな語があり、それぞれの語には固有の意味が結びついていてということ自体は驚くに値しない。しかし表2をさらに女男別に分けてみると、他称の使い分けをしているのはもっぱら男であることがわかる(表3/表4参照)。

回答者が女の場合

	人	奴	者	人間	女男	女性 男性	子(娘)
好きなタイプ	168	0	1	0	4	1	0
嫌いなタイプ	178	3	2	0	6	0	0
理想のタイプ	97	0	0	2	0	2	0

(表3)

回答者が男の場合

	人	奴	者	人間	女男	女性 男性	子(娘)
好きなタイプ	51	1	0	0	1	4	22
嫌いなタイプ	45	16	1	0	20	3	10
理想のタイプ	41	4	0	19	6	0	0

(表4)

「子」を除けば、女にも選択肢としては男と同じものがあるにも関わらず、「人」以外の他称を選んだのは、わずか4.5%である。ほぼ全員が「人」を使っている。一方、男では、43.9%を「人」以外の他称が占めている。さらに、タイプ間の相違も、女にはほとんど見られず、男だけのものである。とすれば、他称間の意味の違いは、決して女男で平行的ではないことになる。すなわち、「人」と「女」の違いは、決して「人」と「男」の違いと同じではないことになる。

女を表す他称がどのような文脈で使われ、どのような語と結びつくかを調べた漆田(1980)には、「女」

と「女性」という他称について次のように書かれている（以下は筆者によるまとめ）。

「女」について

「をんな」は元は「を」と「こ」と対の「ヲトメ」であったものが、「メ」に侮蔑の意味がついてしまったために、新たに作られた「ヲミナ」から発展したものだという。「をとめ」と「を」と「こ」は、上代では結婚期に達している若い女と男を意味したが、平安時代以降「をんな」と「を」と「こ」は女一般、男一般をも意味するようになった。しかしそれだけではなく、「を」と「こ」の語にはさらに多くの意味が発生し、岩波古語辞典の「を」と「こ」の項には「をんな」とは比較にならないほど多くの意味が載せられているという。

をとこ：

- 1) 結婚期にある若い男性
- 2) をみな、をんなの対（立派な一人前の）男性
- 3) 特に女と結婚の関係にある男性、夫
- 4) 男子
- 5) 従者、下男
- 6) 在俗の男
- 7) 武士の身
- 8) 男としての面目、体面
- 9) 男の容貌、男ぶり、男前

をんな：

- 1) 女、女性
- 2) 特に男の相手として深い関係にある女性、結婚の相手の女

そこから漆田は、「を」と「こ」という語はその様々な転義をも包み込んで、一つの統合された概念「男一」となっていったという。それにひきかえ、「をんな」のほうは、一語で多くを意味するようにはならず、むしろ新たな意味には新たな語を必要として、「婦人」や「婦女」「女性」が作り出され、結果、女を表す名称が増える中で、女の概念的統一が壊れていったという。そして「女」には、「婦人」や「女子」「女性」にはない性的なまなましさがあるという。

「女性」について

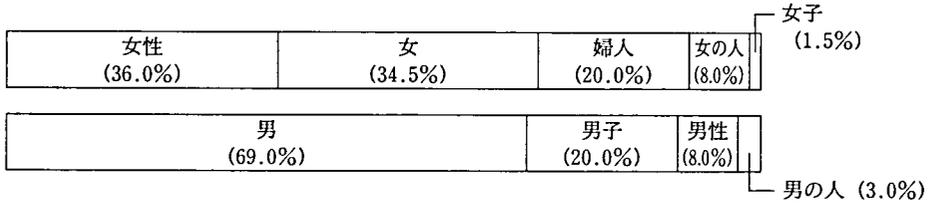
もともと「女として生まれたもの」を意味した「女性」から発展したもので、男を中心とした世界において、それ以外の生を受けた者という程度の意味。

さらに明治初期に文法用語として「女性男性」が取り入れられたことも関係してか、どちらかといえばスマートな取りすました印象がある。特に「男性」は、「女性」の対語として新しく作られたので、対の観念を成熟させなかった文化圏では必要性がなかったのか、使用頻度はきわめて低い。

漆田は、女の他称のみを扱っていたので、「人」や「奴」「子」などについては明らかでないが、少なくとも「女男」「女性男性」についての見解は私たちの回答にも妥当する。「嫌いなタイプ」に使われる傾向にあった「女・男」だが、女は好きな異性に4例、嫌いな異性に6例とほぼ同数で使っているのに比べ（表3参照）、男が「女」という他称を用いるときは、好きなタイプに1例、嫌いなタイプに20例と大きく差がある（表4参照）。漆田のいうように、「女」には「男」にはない特別な意味合いが含まれているのだろう。また「女性男性」についても、私たちの回答では、10例のうち9例が「女性」であり、「男性」という語は1例に過ぎない。確かに「男性」の使用頻度はここでも低い。

漆田の主張で重要なことは、男は概念的に統一されているのに、女は分裂しているという点である。これは、二つのことを意味している。一つは、女達が分裂させられているということ。もう一つは、一人の女が内面的に分裂させられているということ。男はどんな男であろうと、どんな特性を合わせ持っていようと、男である。それに対して、女にはいろいろな女があり、それらはまるで異なる種であるように扱われる。さらに重要なのは、女も本来様々な側面を合わせ持ちながら、そんなことはあり得ないこと、あってはならないことと考えられてしまうことである。「女は魔性」などというのは、思わぬ側面を見せられた驚きのことばであろう。さらに悪いことは、女自身が自分の多面性を認められない、認めたくないという気持ちになることであろう。

女を表す語が男を表す語よりも多く、そのために一語で表される意味範囲が男の語よりも狭いということは、遠藤（1982）の国語辞典の調査、ならびに新聞紙上での使用語の調査でも、明らかにされている。調査対象になった5つの国語辞典から拾い上げた女男を表す語は、380：250、すべての辞典に採用された語だけに限っても40：20と、女語が圧倒的に多い。そしてそれらの語の意味を記述する際に用い



(図1)

られた他称は、図1に示すように数の上でも差があるが、それ以上に語の守備範囲の違いがはっきり出ている。

「女を表す他称は、男に比べて意味範囲が狭い」というのが事実であれば、私たちの回答もうなづける。男達はいろいろな特徴を持った女を表すのに様々な他称を必要としたし、一方、女達は、いかなる特徴を持った男であっても一語ですますことが可能であったのだろう。

女男の間に生じた、他称の数とそれに伴う意味範囲の違いは、何を物語っているのだろうか。語彙が豊富な対象は、その社会において重要な位置を占める、それが通常である。イヌイット語の雪に関する語彙、印刷業界の字体に関する語彙がそれである。では、女は男よりも重要だったのだろうか。そうではない。雪を見る人や字体を区別する人を表す語彙がないからといって、その人達が雪や字体よりも重要でないとは言えないのと同じである。我々は、自分自身に関する語彙を必要としない。必要になったときは、誰かにとって対象となったときである。その意味で、我々の社会は男のものであったといわざるを得ない。そして男によって所有された社会の中で、女が重要であっただけである。見る性と見られる性があつたのである。

こういうことを確認をすることと、そういう社会を認めることは別である。このような社会は、女にとってはいうまでもなく、男にとっても決して愉快な社会であろうとは思えないが、その確認を改めてする必要があるだろうか。

言語と社会の関係について、言語が社会に影響を与えると考えた立場と、社会の方が言語に影響を与えると考える立場がある。前者の立場は、言語上のゆがみを直していくことにより、社会の不平等をなくしていこうと考えるだろうし、後者の立場は、む

しろ社会の不平等にこそメスを入れ、私たちが平等な社会を手にすることができるようになれば、自然と言語は変わっていくと考えるだろう。言葉だけを変えてみてもなんら事態は変わらないということも、確かなことである。また言語というのは、一部の思惑や操作で簡単に変化するものではないということも確かなことである。MissとMrs.に代えて女をMs.と呼ぼうという運動が必ずしも思惑通りに進まず、結果的に女の称号を一つ増やすだけになってしまったことが思い出されよう。

しかし、ことばはそれ自体で変化するものではないことも確かなことである。人々の使用によって変化していくのである。他称の不平等を快いと思わないのであれば、それを口にし、それを変えるために働きかけることができるのは、私たち以外にはいない。

女男における他称の平等性を確保するには、男の他称を増やすか、女の他称を減らすかである。すなわち男を概念的に分離するか、女を概念的に統一するかのどちらかである。さらにいえば、女も男も互いに見る性となり、見られる性となるのか、それともそもそもそのような関係を女男の間に作らないかのどちらかである。私たちの社会は、どちらの選択をするのだろうか。次の節でその予想を立ててみたい。

4. 怠惰なディスコースと急進的なディスコース

これまでは、女男の一般的傾向として、どのような他称が用いられたかということを中心に考察してきた。この節では、回答件数の約半数を占める他称なしの回答について、その意味するところを考え、そして回答者一人一人の個別的傾向が語っていることを考えていこう。他称のついた表現とついていない表現の割合は、表5に示す通りである。

これまでの議論から、いろいろな他称を使い分けることは、対象をより対象化することであると言っていいたいだろう。そういう中では、他称を使用しない

	女			男		
	好きな異性	嫌いな異性	理想の自分	好きな異性	嫌いな異性	理想の自分
他称つき	174	189	101	79	95	70
他称なし	134	110	47	235	196	85
合計	308	299	148	314	291	155

(表5)

という選択は、対象の対象化への拒否、あるいはそこまでいなくても保留と考えることができる。表5を見ると、女を表す他称語彙数を多くもち、それらを使い分けすることも多かった男達の方に、むしろ「他称なし」が多い。意外に思われるかもしれないが、男たちの回答件数の67.9%が他称なしなのである。ちなみに女は38.5%である。表3を見れば、女に許された他称は、「人」以外にはないともいべき状態であるが、女には他称間の選択だけではなく、使用するか使用しないかという選択についてもその自由がないのだろうか。選択肢が一つしかないとなれば、それを使用しないということは、その語の拒否を意味し、漆田のいう「男の概念的統一」を破壊する行為になるのかもしれない。それをあえてするとすれば、社会的制裁を免れないだろう。いずれにしても、女達は許された他称を大いに利用しているといってよい。それに引き替え、男たちはそもそも豊かな数の他称を持ちながら、必ずしもそれを必要としないかのようである。あるいは、それを使いたがっていないようである。確かに男達は、女に比べて多くの他称を使い分けていた。しかし、また同時に他称を使わない傾向が強いという、この相矛盾するような事態を、どう説明すればよいのだろうか。男たちは一般的に二つの矛盾する側面を持っているのか、それとも男の中に異なる2つのタイプの人間がいるために起こった現象だろうか。

次ページの図2はそれを明らかにするものである。59名の男ひとりひとりが、好きなタイプと嫌いなタイプでどのような表現をしたかをまとめたものである。他称6種(自分のことを言及する際のみ)に現れた「人間」を除いている)に「他称使用せず」を加えた7つの選択肢があるわけだが、それぞれのタイプにおいてどれがどの程度用いられたかを個人別に示している。通常は好きなタイプも嫌いなタイプも5つずつ回答することになっていたため、一つの回答は全体の5分の1(20%)に相当している。しかし中には、5つ以下、あるいは5つ以上というのがあり、その場合には1件あたりに相当する部分が大きくなったり小さくなったりしている。

例(3)では8件だから、1件あたりは8分の1に相当し、それぞれの他称使用の割合は次のように表されている(図2内では通し番号40)。

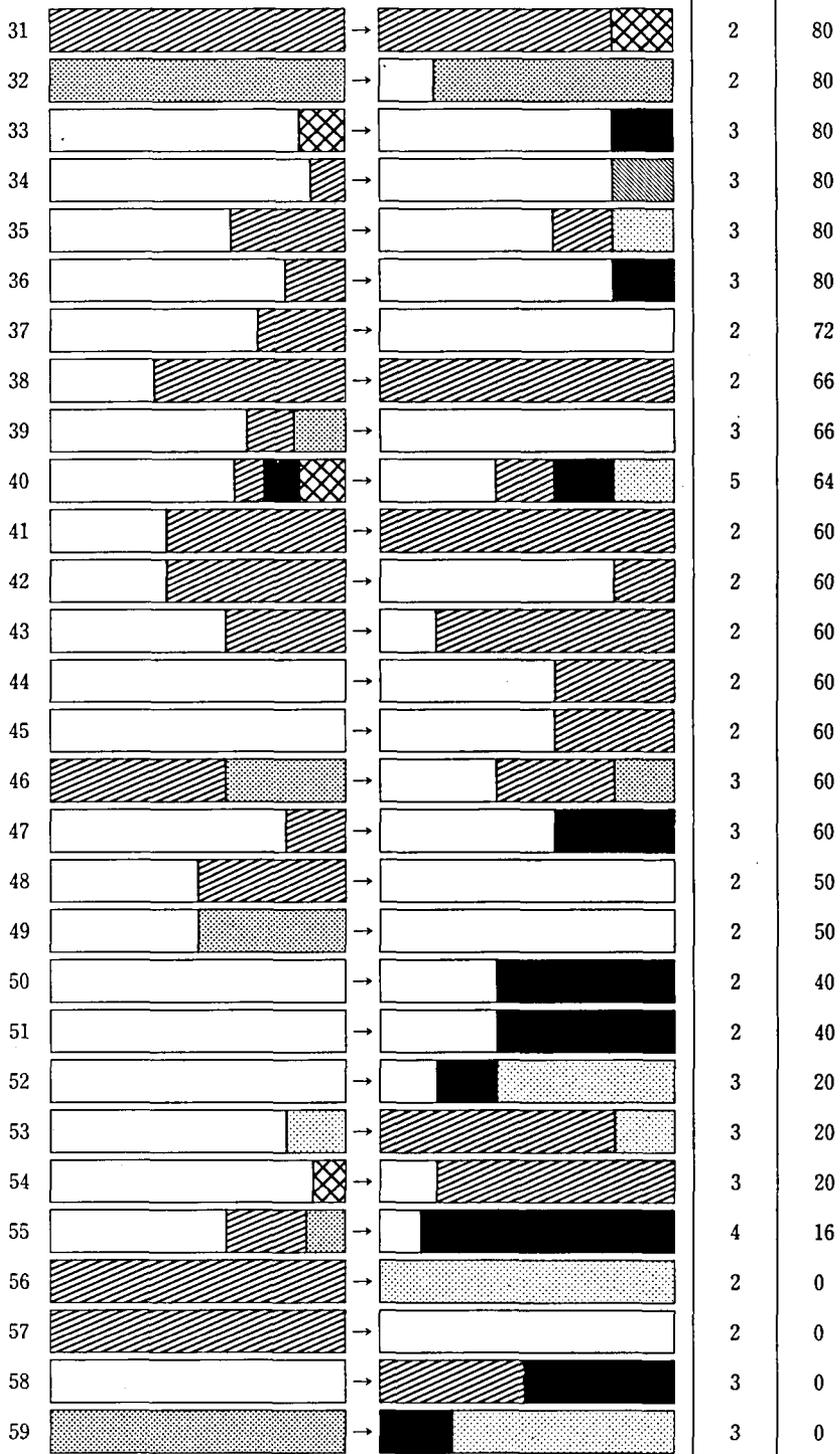
他称使用せず： $5/8 \times 100 = 62.5\%$
 人： $1/8 \times 100 = 12.5\%$
 女性： $1/8 \times 100 = 12.5\%$
 女： $1/8 \times 100 = 12.5\%$

図の左は好きなタイプの選択肢、右は嫌いなタイプの選択肢である。左右を見比べると、タイプによって使い分けをしているかどうか、しているときにはどんな他称を選んだかがわかるようになっている。

種類数	一致率(台) %											計
	0	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	
1つ											25	25
2つ	2				2	2	6	1	5		2	20
3つ	2		3				3		4			12
4つ		1										1
5つ							1					1
6つ												
7つ												
計	4	1	3		2	2	10	1	9		27	59

(表6)

通し 番号	好きなタイプ	嫌いなタイプ	種類数	一致率 %	
1			1	100	□ : 他称なし
2			1	100	▨ : 人
3			1	100	■ : 女
4			1	100	▩ : 子など
5			1	100	▧ : 女性
6			1	100	▦ : 奴
7			1	100	▥ : 者
8			1	100	
9			1	100	
10			1	100	
11			1	100	
12			1	100	
13			1	100	
14			1	100	
15			1	100	
16			1	100	
17			1	100	
18			1	100	
19			1	100	
20			1	100	
21			1	100	
22			1	100	
23			1	100	
24	▨	▨	1	100	
25	▨	▨	1	100	
26	□ ▩	□ ▩	2	100	
27	□ ▧	□ ▧	2	100	
28	□	□ ▧	2	84	
29	□	□ ■	2	84	
30	□	□ ▨	2	80	



(图 2)

右端には両タイプで合計何種類の他称を使用したか、その数と、他称の使用に関して両タイプでどの程度類似しているか、その一致率を示した。それを簡単にまとめたのが、表6である。

表6から明らかになることは、まず個人的に見れば、意外と選択幅は狭いと言うことである。7つの可能性があるにも関わらず、もっとも多いのは1種類ですますやり方で(42.3%)、2種類使った人も含めれば76.2%にも達す。7つの可能性はおろか、4つや5つでもはやこれらは例外と言わざるをえない。潜在的な可能性ということではずいぶん多い選択幅があるにも関わらず、これでは実質「人」以外に選択の余地がないかみえる女たちと変わらないのではないか。

またタイプ別の他称の使い分けも、少数の男のもので、大多数は固定していることがわかる。両タイプで80%以上の一致率を示す男は全体の61.0%にもなる。両タイプで全く異なる他称を用いるのはわずか6.8% (4名)、半分ほどは異なる他称を使うという男を含めても、20.3% (12名)である。ここから明らかになることは、確かにここに挙げたいろいろな他称は、それぞれに固有の意味をもち、語彙的知識としては男たちに共有されたものであるだろうが、実際の使用はかなり制限されているということである。自称や呼称は言うまでもなく、他称であっても、対象に用いられた語は、その対象を特徴づけると共に、それを用いる自分自身をも特徴づけようという側面がある。男たちは実際の言語使用場面で、この豊かなはずの語彙を自在に用いて、女達を分割し、対象化することを好まないのだと言えないだろうか。

私は、これはT.ペートマンのいう「急進的なディスコース」と言えるのではないかと思う。言語は社会を写している。その意味では、他称に関する女男の違いは私たちの社会のありようそのものである。しかし、だからといって、言語と社会の関係を固定的にとらえる必要はなく、社会を写し出した言語をそのままに無反省に用いる(怠惰なディスコース)のではなく、反省的創造的な使用(急進的なディスコース)もできるのではないか。ペートマンの定義によると、「怠惰なディスコースとは、自分の地位を受け入れてしまっている、力のない者の言語である・・・急進的なディスコースとは、怠惰なディスコースの正反対に位置している」(カメロン275f.)言

語である。これまでに、多くのフェミニズム言語学が女男の言語、あるいは言語使用上の差違を指摘してきた。そしてその多くは、女の言語が貧しく、表現力に乏しく、あるいはそもそも言語は男のものであり、女にとっては自分を表現する適切な手段ではないことなどが主張されてきた。しかし、D.カメロンは、それは怠惰なディスコースにおいて妥当なことであり、私たちには急進的なディスコースをすることができると言う。この区別をしたT.ペートマンは、イギリス社会の人たちは怠惰なディスコースをしやすくと特徴づけたが、おそらくいかなる社会にあっても、多くのディスコースは怠惰なものであろう。そうでなければ、言語は言語として十全に機能しないと思うからだ。しかし、また一方で急進的なディスコースがあり、それが言語を変え、社会を変えることにつながっていく。

われわれの男達が、ある意味では使い分けの必要な場面(好き嫌いを区別する場面)で、使い分けのできる語を所有しながらそれを使用しなかったということは、私には急進的なディスコースではないかと思える。女を対象化してきた規範の否定であろう。表5を丁寧に見ると、女も男も、自分より他人を対象化することをためらい、嫌いな人よりも好きな人を対象化することをためらっていることが確認される。これらを総合すると、少なくとも他称に関する限り、女に関する語は少なくともなくなっていくのではないか。ある意味では、期待をも込めた予想である。

5. まとめにかえて

女男の関係について、時代の意識は変わったと言われる。中でも女達の意識変化はめざましく、それに見合うだけの、男の側の変化が見られないとの声も聞かれる。しかし、私たちの回答を見る限り、それは少し当たっていなかった。むしろ男達の方が、規範から自由であると言えるような結果であった。女を対象化につながる他称の使い分けを、手段を手にしながら実行しなかったからである。確かに対象化しないということでは、女の方もそうである。しかし、女はそもそもそのための手段をもっていなかったのであるから、男の積極的な行為とは性格が違う。女達が、数少ない語に甘んじ、男を対象化する語を持たないことになんの不自由も感じてこなかった、その怠惰さが、男に数多くの語を持たせ女を対象化することを許した社会を維持してきたこと

を考えると、様に「人」を用いる女達の行為は、恣情なディスコースと言わねばならないだろう。男達が急進的であるという結果は、あるいは、アンケートの回答者がまだ若かったということに関係があるのかもしれない。しかし、その意味では女もまだ若いのである。もう少し、規範から自由であっていいのではないか。女は変わったと言われながら、好きだ嫌いだという、言ってみればその延長線上に恋愛や結婚が考えられるような意識領域においては、あまり変わっていないのかもしれない。

女には急進的なディスコースをしてもらいたい、しかし人間（男）を分割し対象化するようになってほしいとは思わない。予想はいよいよ難しい。

参考文献

- カメロン・D./中村桃子訳 「フェミニズムと言語理論」 溪草書房, 1990.
- 遠藤織枝 「女性を表す言葉」 『ことば』1号, 1980, 19-54.
- 遠藤織枝 「辞書と新聞に見る男性と女性」 『ことば』3号, 1982, 1-20.
- ことばと女を考える会編 「国語辞典に見る女性差別」 三一書房, 1985.
- 国広哲弥 「「呼称」の諸問題」 『日本語学』9, 1990, 4-7.
- レイコフ・R./れいのるず=秋葉かつえ訳 「言語と性」 有信堂, 1990.
- 漆田和代 「「婦人」「女」「女性」・・・女の一般呼称考」 秋葉かつえ=れいのるず編 「おんなと日本語」 有信堂, 1980, 123-158.
- スペンダー・D 「ことばは男が支配する」 溪草書房, 1987.
- 渡辺恵子 「男らしさ・女らしさの時代差」 『神奈川大学心理・教育研究論集』第8号, 1993, 21-31.